

カスミかヤケか

今野尚子

江戸時代前期の漢学者伊藤東涯は中国文献に
出典をもつ語を蒐集し、語彙集を編んでいる。
最も名高く、最も規模の大きいものは
『名物六帖』で、百三十年にわたってその一
部が刊行されている。この『名物六帖』の中
に「霞」という項目がある。項目全体を引用
するとつぎのようになっていゝ（へん内は原
文の細字双行を、／は改行をあらわす。なお
漢文の返り点等は省略する）。

○霞（説文）／赤雲氣／也从雨段聲雲日
氣相薄○増韻——日旁彤雲通作靄○霞日旁
之赤氣與春時之靄別

『名物六帖』では「霞」につづいて「朝霞」、
「暮霞」が立項されており、いずれも「霞」
には「ヤケ」という傍訓が対応している。
『名物六帖』よりも規模がずっと小さく、性

格をやや異にする同じ東涯の語彙集に「応氏
六帖」がある。この中にも「霞」はやはり
「ヤケ」の傍訓付きで収められている。『応氏
六帖』では「霞」につづいて「靄」が掲げら
れている点に興味ぶかい。「靄」のほうは
『名物六帖』にはみられない。『応氏六帖』伝
本の大部分は「霞・靄」の見出し語と傍訓の
みを掲げるが、長澤規矩也氏蔵本・黒川本
（この二本は非常に近い関係にある）には
「霞」の下に「朝／暮」を掲げる。こ
れは「名物六帖」の状態に通じる。また、静
嘉堂文庫蔵本はつぎのような註を付す。

霞（ヘユフヤケ アサヤケ 日旁彤雲／俗
春ノ氣トス誤也）

そもそもこの「霞」は「雨」に赤いという
意味をもつ音符を組み合わせた文字で、『名
物六帖』の註にみられるように、中国の字
書・韻書では「赤氣」と解説される。つまり
『名物六帖』や『応氏六帖』が「霞」に「ヤ
ケ」をあてるのは、この字の本来の意味にか
なっている。

ところが古来日本では「霞」に「カスミ」
の語を対応させてきた。たとえば『古事記』
中巻に「春山之霞壯夫」という神が兄の「秋
山之下氷壯夫」と一人の女性をめぐって争う
話がある。この二神を「ハルヤマノカスミヲ
トコ・アキヤマノシタヒヲトコ」とよんでい
る。また平安時代以降、霞は春、霧は秋とい
う見方が固定し、「春霞・秋霧」の語が使わ
れるようになった。

春霞かすみていにしかりがねは 今ぞな
くなる 秋ぎりのうへに(古今集 卷

四)

「カスミ」という語そのものには「赤」の要素を見出しがたい。霧や雲、あるいは煙などと並べて用いられる。

あさ霞ふかく見ゆるやけぶりたつ室の八
島のわたりなるらん(新古今集 卷一)

ここでは「あさ霞」を「けぶり」と重ねてみているのであり、赤い色つまり「アサヤケ」とはやはり異なると考えられる。「金光明最勝王経音義」では、「霧」に「加須美」という訓がある(「霞」字は収められていない)。

辞書類をみても「霞」は「カスミ」の訓と対応させるのが一般的である。ところが、このときに中国の文献から註を引用するとおかしなことになる。平安時代に成立した『和名類聚抄』はつぎのようになっている。

霞 唐韻云霞赤氣雲也胡加反(和名/加須/美)

「唐韻……」という註記は中国の韻書からのものであり、「赤氣雲也」は中国語としての「霞」字の意味ということになる。また、室町時代の『倭玉篇』夢梅本でも「東方赤

カスミ」とし、『篇目次第』では「ヘカスミ/東方赤氣騰為雲」とする。江戸時代の『和漢音釈書言字考』では、中国の『字彙』から「日旁彤雲也」という記述を引用している。そして左右両側にそれぞれ「アカネ・カスミ」の訓を付している。左訓として「アカネ」を付したのが著者横島昭武の苦心であった。つまり「霞」字本来の字義は「赤氣」であるが、日本語の「カスミ」とでは齟齬をまねいてしまう。それを解消するための左訓がこの「アカネ」なのである。逆に「霞」の字義にこだわったのが新井白石であった。白石は『東雅』という語源書の中で「カスミ」の語源についてつぎのように述べている。

義不詳倭名鈔には唐韻を引て日邊赤雲也と注しぬ説文に雲日氣相薄とも見えてすなはち晨霞暮霞などいひしものにて此にしても朝霞夕霞などもいひまた西刺日とも豊旗雲に日刺などもいひしものこれ也今俗にはアサヤケユフヤケなどもいふ也カスミといひしは赤彩也萬葉集に力といひしは赤き義也といふ(中略) 日本紀には彩讀てシミといふ(後略)

白石は「カスミ」の語源を説くにあたり

「赤彩」という解釈をしているのである。これは「霞」の字義にひかれたためと考えられる。このような語源説は他にもみられる。

さて伊藤東涯にもどうろう。東涯は最初にみたように「名物六帖」「応氏六帖」で「霞」字に「ヤケ」の訓を付す。しかも「與春時之霞別」(「名物」)、「俗春ノ氣トス誤也」(「応氏」)という註記から、「霞」と「ヤケ」との結びつきに対する強いこだわりが感じられる。『名物六帖』には東涯自身の序文(正徳四年)があり、実はそこでこの「霞」についてふれられている(原文は漢文であるが訓み下して引用)

訛傳日に滋げく字漢文を用て譯其義に乖く。唯譌の霞となり箴の梭となるのみならず疑似混淆これ能く正すこと莫し。東涯が「霞」字と「ヤケ」との結びつきにこだわったのは、「霞」字本来の字義を明らかにするためであった。東涯は日本語における霞=カスミを否定したのではなく中国語としての「霞」の字義に忠実であろうとしたのである。なお、十六世紀末の中国の『日本風土記』中に「霞(下吉)やけ」という記述がみえることを言い添えておく。